

第275回くらしの植物苑観察会 令和4年2月26日(土)

「天神さんと花々のものがたり」

辻 誠一郎 (東京大学名誉教授)

天神とは、江戸期以前の日本漢文学者の中でベストワンとされる菅原道真の神号です。その天神をお祀りしている神社を、親しみを持って天神さんと呼んでいます。京都の北野天満宮(京都では北野さん)、福岡の大宰府天満宮、東京の湯島天神、亀戸天神をはじめとして、全国には天神をお祀りする天満宮・天神と名の付く神社があまたあります。入試のシーズンになると、境内は参拝の人々で賑わいます。死後は天神となり学問の神様として崇められきたからです。菅原道真は、生前には文章博士に任ぜられ、右大臣まで上り詰めた大学者でしたが、57歳のとき不幸にして大宰府に左遷され、その2年後の延喜3(903)年2月25日、59歳で静かにこの世を去りました。昨日が命日でした。

菅原道真といえば、花々を愛し、花文化を広めたことでも有名です。古代律令国家がスタートしたころ、あるいはそれより少し前に、中国からもたらされた文化は多様であったと考えられます。その代表的なものに花文化を挙げることができます。なかでも梅と菊の花文化は当時の社会文化に大きな影響をおよぼしたと考えられます。そのことは道真が生涯で残したおびただしい詩文からもうかがい知ることができます。「菅家の文華」を著した清藤鶴美さんは、道真といえば梅だけれど、詩文には、梅のほかに菊、竹が頻りに詠われており、梅、菊、竹の三種が道真の日常生活に深くかかわっていたのではないかとされています(清藤、1971)。どうして三種なのか、梅・菊・竹の三者に共通するものは、貞節であり、清純であるからだと言いつつ切っています。道真は、そのような三者に込められた文化的な意味、精神的な意味を漢文学をとおして理解し、自らも貞節で清純でありたいという姿勢、生きざまを貫いたのでしょう。

古代日本の文化は、中国からの漢文学、花文化に強く影響を受けていたように思われます。昨日が菅原道真の命日であり、梅花祭が催されたこともあり、菅原道真の生涯と梅を詠った詩文から、その人の生きざまと花文化の心情の世界を垣間見てみましょう。

菅原道真の生涯と梅の花

菅原道真は承和12(845)年6月25日、京都で生まれます。幼少から中央官僚時代、失意の讃岐守時代、再び中央官僚時代、そして失意の大宰権帥時代に入って間もなくの延喜3(903)年2月25日、静かにこの世を去ってしまいます。失意というのはいわゆる左遷に傷ついたことを意味しています。大宰府への左遷は藤原氏の陰謀、学閥による対抗によるものと考えられています。この大学者の失意と左遷という名誉失墜は、死後20年に右大臣正二位、死後90年に左大臣正一位つづき太政大臣が贈られることで名誉挽回が図られていくのです。

このような生涯を通して、道真はとりわけ梅の花を愛したことが詩文から知ることができます。そして、天神となってからは、天神信仰の普及とともに梅文化といっても過言ではない花文化が全国に普及していきました。

「梅の花 紅の色にも似たるかな 阿呼がほほにつけたくぞある」

これは5歳の時、庭前の紅梅を見て詠んだと伝えられます。良く知られているように、梅は中国から日本にもたらされた植物です。花文化の贈答であった可能性もあります。それゆえ上流層

を中心とした花文化であったと考えられます。天平2(730)年に大宰府で梅花の宴が催されたころは白梅が愛でられていたようですが、その後紅梅も加わって、道真のころは京都でも紅白梅が庭に植えられていたのでしょう。女性の紅に似た紅梅に感激したようです。そして梅には貞節、清純という意味が込められていたことを知っていたのかもしれませんが。

「月の耀きは晴れたる雪の如く / 梅の花は照れる星に似たり / 憐れむ可し 金鏡転じ / 庭上に玉房の馨れるを」(漢詩文の読み下しは清藤鶴美による、/ は改行)

これは11歳の時、「月夜梅花を見る」と題して詠った漢詩で、初めての作詩だとされています。梅の花はぴかぴか光る星みたい、庭には梅のいい匂いがただよっているというのです。お月さんと梅の花にとっても感激している様子が伝わってきます。

「東風吹かば匂いおこせよ梅の花主なしとて春を忘るな」(拾遺集)(大鏡では「春な忘れそ」)

これは大宰府への左遷を悲しんで詠ったものです。京都を立つ日、すなわち延喜1(901)年2月1日、邸宅の庭前の真っ盛りの梅を詠ったものとされています。主を追いかけて大宰府に飛んでいったとされる「飛梅」は、その庭前の紅白梅だったのでしょうか。飛梅伝説も中国の詩文のなかの「客夢の遊魂」にもとづいているのでしょうか。

延喜2(902)年、大宰府に居して1年が経ち、「梅花」と題する漢詩文を残しています(清藤鶴美による漢詩文の意識)。悲しみの絶えない自己を振り返り、大好きな梅に対して、悲しみの情をよくぶちまかたものだったと反省して詠ったのだと清藤さんは言います。

「宣風坊の邸に山口谷風に植えさせた梅 / 仁寿殿での正月内宴の折 よく応制詩に詠んだ梅 / 相手の梅はちがうが 詠むは同じこの道真 / さぞや梅花は 道真は悲しみ多き男よと笑っているだろう」

そして、延喜3(903)年早春、辞世の詩が詠まれます。そこには、梅の花への幻想、罪が晴れて京都へ帰りたい願望が込められています。わが身は貞節、清純であることを最後まで訴え続けたのでしょう。

天神信仰の普及とともに梅文化は急速に全国に広がりましたが、平安期に隆盛した桜文化が野山や路傍の並木として育まれていったのに対して、梅文化は庭園など囲われた世界で育まれていきました。道真が愛した菊文化も同様に限られた世界で育まれていきました。梅に貞節、清純の意が込められたように、桜にも、また菊にも、それぞれ心情の意が込められてきたのです。そんなことを考えながら、くらしの植物苑を歩いて観てください。

菅原道真の詩歌の世界、また道真ゆかりの花々については以下の書籍が参考になります。

清藤鶴美「菅家の文華」太宰府天満宮文化研究所発行、1971年

福田万里子「菅原道真公花の歳時記」太宰府天満宮文化研究所発行、2001年

.....

次回予告 第276回くらしの植物苑観察会 令和4年3月26日(土)

「花見の民俗」 副館長 関沢 まゆみ

13:30~15:30(未定) 苑内休憩所集合 申込不要 定員20名